

講演会 日本の放射能被害を防ごう

〈ウクライナ〉タチアナ・アンドロシェンコ女史が語る
「極低線量汚染地域・健康被害の真実」

誰も知らない27年後のチェルノブイリ

福島原発事故で、どのような被害が出るのか、それには、チェルノブイリ原発事故に学ぶしかありません。

食品と暮らしの安全基金では、ウクライナを訪れ、多くの子どもが健康被害で苦しんでいる実態を知りました。

「足が痛い」「頭が痛い」「自律神経失調症」「風邪をひきやすい」「鼻血」「疲れる」「心臓が痛い」……

取材したのは、空間線量が埼玉とほとんど同じ地域です。

その子どもたちの食べものを変えて、元気にする術を見つけました。

私たちの調査に協力してくれているのが、自身も、健康被害に遭っていたタチアナ・アンドロシェンコ女史です。

タチアナ女史の話は、日本でも、これから起きると考えられる健康被害を少なくするために、聞かなくてはならない内容です。

子どもたちのため、自分自身の健康のためにも、一人でも多くの方に「極低線量汚染地域・健康被害の真実」を知っていただきたいと思います。講演会に、ぜひご参加ください。

◇11月16日(土) 参加費 500円

13:30 ~ 15:30 講演

15:40 ~ 16:40 質疑

交流会 17:10 ~

会場：さいたま市産業文化センター（さいたま市中央区下落合 5-4-3）
埼京線・与野本町駅東口 徒歩6分、京浜東北線・与野駅西口 徒歩15分

調査報告



1967年生まれ。看護師、フランス大使館勤務を経て、現在は「食品と暮らしの安全基金」調査コーディネータ

チェルノブイリ原発事故が起きた1986年4月末から30km圏は避難地域になり、原発から遠ざかる道は、避難の車で大渋滞していました。

その脇の空いた道路を反対方向に向かって車を走らせていたのが、妊娠中のタチアナさんです。

タチアナさんは看護師でしたが、放射能の知識はなく、出産のため、原発から30数km西にあるノーヴィミール村に里帰りしたのです。

結局、首都キエフに戻って女の子を出産し、村とキエフを行き来していたら、6年後の1992年に、全村民が180km南のコヴァリン村へ強制移住させられました。



＜お申込・お問合せ＞

☎048-851-1212 ※当日参加も可

FAX: 048-851-1214

メール: mail@tabemono.info

＜主催＞

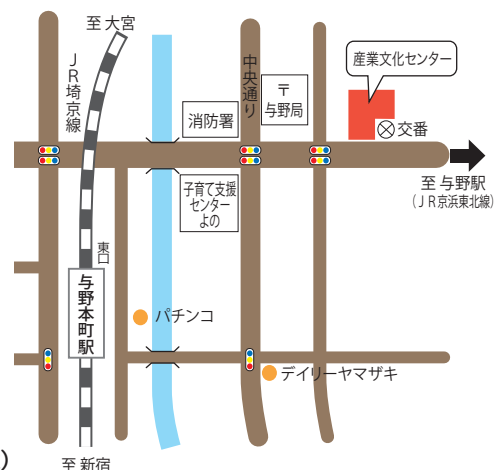
NPO法人 食品と暮らしの安全基金

さいたま市中央区本町東 2-14-18

＜後援＞

内部被ばくを考える市民研究会

埼玉反原発アクション



◇18日(月) 盛岡アイーナホール (お申込・お問合せ ☎019-605-3345)

◇19日(火) 仙台市市民活動サポートセンター (お申込・お問合せ ☎048-851-1212)

◇21日(木) 衆議院第一議員会館・多目的ホール (お申込・お問合せ ☎048-851-1212)